２０２３年度「全国盲ろう者大会」中止にあたり思うこと

社会福祉法人 全国盲ろう者協会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　理事　福島 智

全国の盲ろう者のみなさん、盲ろう者に日々寄り添ってくださっている多くのみなさん、お元気でお過ごしでしょうか。

　コロナ禍の日々もかれこれ３年になろうとしています。新型コロナウイルス感染症のまん延という思いもしなかった状況により、私たちのこれまでの生活に大きな影響がありました。マスク着用を初めとして、あらゆる場面で様々な制限を受けています。こうした日々の中で、うんざりするとともに、「コロナウイルスよ、早く消えてなくなってくれ」という思いでいっぱいです。

　そんなおり、国のコロナウイルスに関連した「方針転換」という報道がありました。これは希望の持てるニュースです。私が今、自力で簡単に読めるのはＮＨＫのネットニュースでしたので、さっそく関連する記事を探しました。以下、かなり長文になりますが、私が調べた記事の一部の紹介と、それに対する私の意見・感想です。

　まず、ＮＨＫのネットニュースの一つ目の記事です。（２０２３年１月２７日　２０時３７分配信）

「新型コロナの感染症法上の位置づけについて、政府は、ことし５月８日に、季節性インフルエンザなどと同じ『５類』に移行する方針を正式に決めました」

　うんうん、何かよくは分かりませんが、「５類」というのは、季節性インフルエンザなどと同等になったということでしょうね。しかし、記事は続きます。

　「対策にあたってきた専門家は『季節性インフルエンザと同様の対応が可能な病気になるにはもうしばらく時間がかかる』として、『５類』になっても引き続き感染対策が求められるとしています」

　そして、ぶっそうな話が出てきます。

　「感染した人のうち、亡くなる人の割合『致死率』は最初に感染が拡大した２０２０年春ごろの第１波では５％を超えていました。その後、治療法の進歩やワクチン接種の進展もあり、去年（２０２２年）秋以降から現在に至るまでの第８波では０．２０％と下がってきています。

　一方で、感染がより広がりやすいオミクロン株になったことで感染者数が桁違いに増加し、亡くなった人は去年１２月からの２か月ほどで約１万７０００人（１月２６日時点）と、これまでに亡くなった人のうちのおよそ４人に１人を占めています」

　え？　つまり、この２カ月でコロナにより亡くなった人は、この３年間にコロナで亡くなった人の４分の１に相当するということなのか？　この数字について、各メディアはあまりきちんと報道していませんね。

　それから「コロナの季節性」と、ウイルスの「変異のペース」についても述べられます。

　「専門家は毎年冬に流行するインフルエンザと異なり、季節を問わず感染が広がり流行の規模や時期が予測できないため、対応が難しいとしています。さらに、新型コロナは変異が起きるペースがインフルエンザに比べて速く、新しい変異ウイルスが出現するおそれがあるとしています」

　たしかにインフルエンザは冬によく流行しますが、コロナは冬以外の季節でも感染拡大が起きているということですね。そして、次のような記述もあります。

　「政府分科会の尾身茂会長は１月２４日、ＮＨＫの番組の中で『５類に移行すれば自動的に感染者数や死亡者数が減るということはなく、コロナ診療に参加する医療機関の数が増えるということでもない』」

　それならどうして、「５類」に変更するのでしょうか。次のように記事は続きます。少し長くなります。

　「『社会・経済・教育をなるべく普通に戻す』、そうした中でも『必要な医療を提供できること』が非常に重要で、この２つの目的を実現するために、準備期間をおいて段階的にやっていく必要がある」と述べました。

　また、感染を受け入れる社会になっていくのかと問われたのに対し「『感染を許容する』というのは『一定の死亡者を許容するかどうか』という議論とつながる。諸外国の例を見ても、対策を急激に緩和してしまうと死亡者が急激に発生することがわかっている。医学の領域を超えて価値観の問題で、医療関係者か経済の人なのか、高齢者か若い人なのかでも見る景色が違ってくる」

　つまり、社会・経済面での活動の活発化などが今回の方針転換の背景にあるということですね。考えてみると、「５類」に移行しても、新型コロナウイルスの感染力や病原性が変わるわけではないというのは、あたりまえのことですね。

　同じ日に、ＮＨＫで、もう一つの記事が配信されています（２０２３年１月２７日　２２時３２分配信）

　政府分科会の尾身茂会長が、「コロナは変化し続けていて、慎重さが必要」と述べたとする記事です。

　「病原性が大きく強まる変異が起きたり、同じオミクロン株であってもどんなに頑張っても医療ひっ迫が起きてしまう事態が起きてしまったりした場合は、対応を見直すことは当然必要になると思う」と尾身会長は指摘しました。

　では、国民はどうすれば良いのでしょうか。尾身会長の発言です。

　「いままでは国や自治体からの一律の要請に応える形だったが、これからは個人や集団がリスクに応じて主体的に選択することになる。（中略）たとえば、グループの中に重症化しやすい人がいる場合といつも一緒にいる人だけの場合ではリスクが異なる」

　このように見てきますと、今回の「方針転換」とは、次のようなことのようです。

　・新型コロナウイルスの感染がおさまったわけではない。

　・感染者は依然として高い水準にあり、死亡者はむしろ増大している。

　・しかし、いつまでも今のようにしていては、社会・経済・教育などの活動が停滞し、行き詰まってしまう。

　・したがって、国や自治体からの感染防止についての一律の制限要請はやめて、それぞれの個人やグループで判断してもらうことにする。

　・ただし、状況がさらに悪くなれば、再び「方針転換」するかもしれない。

　この他、政治家の中には、「外国ではマスクをしていない。日本だけだ」という趣旨の発言をしている人もいます。しかし、記事中にもあったとおり、対策を急激に緩和すると、死亡者が急激に発生する例があるとされています。

　たとえば、１月２８日のＮＨＫのネット記事では、中国の状況を以下のように伝えています。

　「中国では、１２月７日に感染対策が大幅に緩和されたあと各地で感染の拡大が続いています。これで１２月８日から１月２６日までの１か月余りの死者数は、合わせて７万８９６０人となりましたが、自宅で死亡した人は含まれておらず、実際にはもっと多いという指摘も出ています」（２０２３年１月２８日　２０時３２分配信）

　さて、では私たち盲ろう者やその身近な人たちはどのように考えれば良いのでしょうか。ご承知のとおり、昨年半ばごろからは行動制限もなくなり、また今年に入ってからは、前述のように、感染症法上の位置づけも、（５月８日から）見直される方針となりました。

　マスク着用に関しても見直しが検討されるなど、これは社会を通常の生活に戻していくという動きであり、その意味では喜ばしいことです。しかし、盲ろう者が大勢集まり、直接交流を持つという私たちの全国大会が今年の夏、安全に開催できるのかと考えると、さまざまな懸念や不安が浮かびます。

　私たちは直接触れ合ったり、近接しないとコミュニケーションをとったり、通訳を受けることができません。記事中にもありましたように、同じく複数の人が集まると言っても、「グループの中に重症化しやすい人がいる場合といつも一緒にいる人だけの場合ではリスクが異なる」ということです。

　全国大会は「グループ」などと言えないほど、多数の人が集まる場です。しかも私たちは、「密着」しての直接的接触ということになり、普通のイベントとは単純に比較できません。

　盲ろう者の中には高齢の人も多くおられますし、そうでなくても、合併症や基礎疾患を持っていて、免疫力が高くない人もおられるでしょう。いったんコロナの感染者が出ますと、「全国大会の会場」という特殊な環境を考慮すれば、どれだけ感染が広がるか予想ができません。また、コロナウイルスが「季節性ウイルス」とは言えないということも忘れてはなりません。つまり、インフルエンザと異なり、冬だけでなく、夏でも感染拡大が多く見られるということです。

　もし盲ろう者が感染した場合、どうなるでしょうか。万が一ある程度以上重い症状であれば、入院が必要でしょう。そうなれば、たとえ条件付きで付き添いの人が入れるといっても、たいへんな不自由と困難を経験することになると思います。そして、幸い軽い症状で回復した場合でも、いろいろな後遺症が出る危険性もあります。

　私が個人的に思う盲ろう者にとって最もつらい後遺症の一つは、嗅覚障害です。別の原因でかつて、断続的な嗅覚障害になったことがあります。嗅覚が低下すると、食べ物の味も分かりません。つまり、嗅覚障害になれば、事実上、味覚障害になったのも同じで、何を食べても味が分からないのです。つまり、嗅覚障害となった盲ろう者は、視覚と聴覚の２重障害ではなく、触覚以外の４感覚を失った「４重障害」の状態になってしまうということです。

　全国盲ろう者協会では、全国盲ろう者団体連絡協議会と共に、今年の夏の大会開催について、これまで議論を重ねてきました。大会を待ち望んでおられる盲ろう者の声も多く聞いていますので、なんとか開催できないものかと検討しました。全国の仲間が年に一度集う大会は、仲間との再会や出会いを通して、われわれ盲ろう者が直接コミュニケーションを交わすことのできる唯一の機会です。この大会を通じて、「また１年頑張ろう、また１年後に再会しよう」というように、それぞれの生きがいの原動力になっていると言っても過言ではありません。

　一方で、密接なコミュニケーションを必要とするのが盲ろう者であることも事実です。これにより、もし一人でも感染者がいた場合、それに伴い感染のリスクは高くなると言わざるを得ません。また、感染後の病状によっては、入院等も出てくるかもしれません。私もコロナではありませんが、かつて入院した経験があります。一人になる時間が多く、コミュニケーションが遮断されるという状況は、もう味わいたくない経験です。

　こうしたさまざまな面を考えますと、今回の政府の「方針転換」の発表により、直ちに「今年から全国大会が開催できる」とは、とても言えないと思います。

　もう少しだけ、このコロナの行方を見守りましょう。元気でいれば、必ず再会できます。

　互いに笑顔で語り合える機会が早く訪れますよう、心から願っています。もう少しの我慢です。

２０２３年１月３０日